Japanese Journal of Applied Psychology
2001, Vol.27. No.2, 47-70

シンポジウム

ライフスタイルの変化と携帯電話

企画・司会　正田　亘（常磐大学人間科学部教授）

話題提供者とテーマ

森下高治（流通科学大学商学部教授）
「これからの勤労者のライフスタイル」

濱保久（北星学園大学社会福祉学部教授）
「携帯電話が生活文化に及ぼす影響」

南隆男（慶応義塾大学文学部教授）
「大学生の携帯電話利用の心理・社会的背景」

石田敏郎（早稲田大学人間科学部教授）
「携帯電話と自動車運転」

指定討論者　向井希宏（中京大学心理学部助教授）

申紅仙（立教大学非常勤講師）

この公開シンポジウムは、平成13年1月27日（土）に、駒沢大学において開催された。

正田：私は，昨年から応用心理学会の公開シンポジウム関係の責任者を仰せつかりました，常磐大学の正田と申します。本日のシンポジウムの主旨は，ご案内の案内書に書いてありますので，省略させて頂きますが，一応，演者の方と指定討論者の方を私の方から簡単にご紹介させて頂きたいと思います。皆様方から向かって一番左側が早稲田大学人間科学部の教授でいらっしゃって，昨年，人間工学会で「携帯電話と自動車運転」の研究をご発表頂きました石田　敏郎先生です。そのお隣が，慶應義塾大学文学部教授の南　隆男先生。1998年に応用心理学会で，「大学生の携帯電話利用の心理社会的背景」をご発表なさっておられます。お隣が，北海道札幌から今日お見え頂きました，北星学園大学社会福祉学部教授の濱　保久先生。昨年，応用心理学会で，「携帯電話が生活文化に及ぼす影響」をご発表頂いております。そのお隣が，流通科学大学商学部教授の森下　高治先生。1999年応用心理学会で「ライフスタイルの国際比較」等をご発表になっております。そのお隣が，紅一点の申　紅仙先生です。彼女の専攻は産業・組織心理学ですが，数年前に『安全衛生のひろば』という雑誌に「現代若者考」というエッセイを1年間連載して大変好評でありました。今日は，女性の立場ということと，1999年度応用心理学会研究奨励賞を彼女が受賞されておりますので，その研究の立場からもコメント頂きたいと思います。私のお隣が，中京大学心理学部助教授の向井希宏先生です。日本の大学では初めて心理学部が作られた中京大学の助教授を務められております。1996年度から応用心理学会で「高年齢者の作業遂行行動」などを発表されておりますので，今日は，高年齢者の立場からコメント頂きたいということでご参加頂きました。先生も1999年度，応用心理学会学会賞を受賞されておられます。

それでは，座らせて頂きますが，最初に森下先生から，「これからの勤労者のライフスタイル」ということで，ご発表頂きますが，お一人大体20分前後ご発表頂いて，そのあと休憩後に指定討論者からコメントを頂き，またフロアーの方と，意見を交わし合いたいと思っております。森下先生どうぞ。

森下：流通科学大学の森下でございます。よろしくお願い致します。私に与えられた演題は，「これからの勤労者のライフスタイル」と言うことでありますが，最初にお断りをちょっとさせて戴きます。実は私はこういうシンポジウムに関わらず，携帯電話を持っておりません。

最初に正田先生からお話を戴いた時にお断りしようと思ったのですが，持っていない立場からお話をさせて戴くのもよいかなと思いまして，お引き受け致しました。

私は，勤労者のライフスタイルと言うことで，ここ2年ほど中国，あるいはインドネシア，タイなどに行きまして，日本国内も含めて勤労者のライフスタイルの問題を扱っていますが，それを後ほど携帯電話の問題との関わりの中でお話をさせて戴きたいと思います。私自身，折角こういう機会を戴いたと言うことで，勉強のためにも勤労者と学生を対象に携帯電話に関する実態調査を急ではありましたが12月の末，しかも，会社の方は20日から28日の中で調査をしました。勤労者はわずか200名ほど，学生も300名弱なんですが大体現在のところ95%ぐらいの人たちが，学生も勤労者も携帯電話を持っているという実態でした。これは特定企業，特定大学の学生であります。

ところで，私が持っていないのは，ある面では時間的に追われるっていうか，携帯電話を持つと逆に自分の時間がなかなかうまく取れないこともあって持っていないのですが，勤労者の方ですと，そのへんは学生と同じような形で持っていらっしゃいます。

そこで，今から20分ほどの非常に限られた時間でありますが，わが国の勤労者のライフスタイルについて，既に応用心理学会でも発表させて戴いていますが，お手元のレジメに沿って話をさせて戴きます。

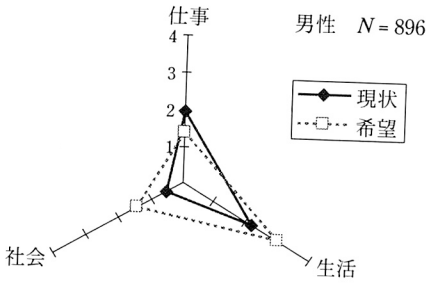
私たちは，一応心理的空間としての意識の問題と，物理的空間としてのエネルギー，時間，そしてお金を投じる場として労働の場，生活の場，社会の場と言う3つの場を設定しました。意識面では，心理的空間として3つの意識を問題にしてきました。意識については，私たちは労働と非労働という部分で区分けしますと仕事意識と余暇，社会活動意識の大きくは2つに別れるのですが，ここでは，今分けました非労働の部分をさらに二分し，合計3つの場に対する3つの意識を問題にして9つのセルを考えました。

私ども関西の方でNIP研究会を組織していますが，研究会ではライフスタイルに関する測定の問題を扱って，98年に改訂版ライフスタイルに関する調査票を作成致しました。合計27からなる質問を用意しましたが，例えば，給料やポケットマネーを仕事に使うことが多いかどうかの質問は，それは現実の労働場面における仕事意識を問題にしています。また，定められた勤務時間の後でも残業など仕事をすることが多いかどうかは，これも仕事意識の労働場面を測定しており，このような形で9つのセルで区分けしています。

原点は，生活の場の余暇・自由意識ですが，勤労者の皆さんはやはり第一に労働の場の仕事意識が中心です。また，家庭，家に帰っても仕事意識が頭の中に入っている，あるいは社会の場でも付き合いも含めて仕事意識が入っている状態です。

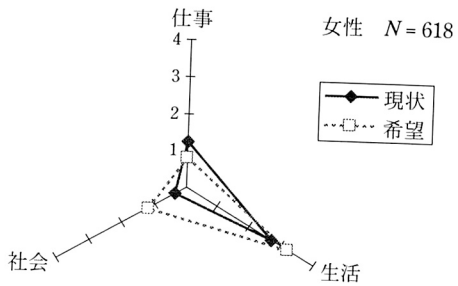
最終的には3つの場を通して，仕事意識，余暇・自由意識，社会活動意識がどれほどか，すなわち，取り組み（現状認知）ともっとやりたいとする志向（希望）を計って，これでもってライフスタイルの測定を試みようとした訳です。これは測定の問題でお手元のレジメにある最初のところに掲載されています。図をお見せ致しますと，今申し上げた現在に取り組みの状況ともっとしたいという希望，この2つでもって意識を測っています。そして，仕事意識，余暇・自由意識，社会活動意識と3つの場でライフスタイルの測定模式図が成り立つわけであります。宗教と働くことの目的を省いた24の質問を用い，実際に働く人たち，特に日本の勤労者にぶつけた結果が図1の通りです。5段階でお聞きしまして，グラフィックは0から4にしていますが，男性の日本の勤労者，これは大企業に働く896名の1999年時点での調査結果です。

2が平均値ですので2より少し下がったところが



男性

	仕事	生活	社会
現状	1.92	2.20	0.54
希望	1.38	2.99	1.40



女性

	仕事	生活	社会
現状	1.22	2.66	0.35
希望	0.80	3.23	1.20

図1　男女別ライフ・スタイル結果

現在の仕事の取り組み状態です。また，希望であるもっと仕事をしたいと言うのは，現在の取り組みより下がっている状態にあります。生活，余暇生活の方は，2が平均ですから現状認知は仕事より少し高く，希望はもっとレジャーや余暇，家庭の団らんを楽しみたいとのことです。さらに，社会活動は0が一番低い値で，社会活動への取り組みはそれほど強くないと言う結果です。社会活動は，少しやりたいとしていますが，これは男性の日本の勤労者の，私どもの研究会でも5,000名ほどのデータを持っていますが，大体こういう傾向にあります。

一方，女性ですが，仕事意識の現在の取り組みは，男性より低い状態にあります。そして，余暇・自由，これは趣味，スポーツあるいは家族との団らんに対する取り組みですが，男性より高いと言う結果です。なおかつ3.23でありますからもっと余暇生活を楽しみたいとの希望を示しました。つまり，仕事意識の現在の取り組みは弱く，希望も同じように弱いのですが，その分は余暇生活が非常に脹らんでいます。図で申しますと右の方が出っ張っています。先ほどの男性の結果も，やや右の方が出っ張っていましたが，仕事意識と余暇生活，社会生活は男女によって違いがあるわけです。

今度はそれを念頭に置きながら，1989年と1999年のこの10年の動きを示した同一企業のデータを示しますと10年前と10年後，時代差（コホート）の変化，それから横断的に年齢を見ていきますと，レジメにも書いていますように大体40歳代までが，

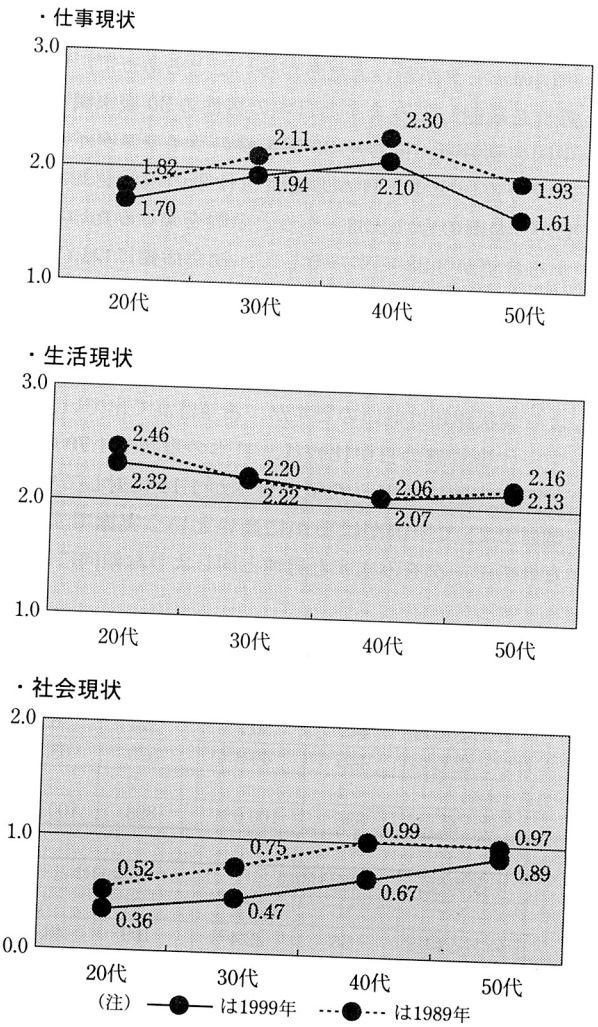


図2　コホート差

仕事の現在の取り組み，現状認知が上がっていきます。そして50歳代に入ると下降の状態にあります。図2の通り，99年の年齢による推移は50歳代でこのように下がっています。要するに，仕事意識の現状は，若干この10年のなかで下降傾向にあります。こちらは役職の関係もあって，89年のデータが逆転していますが，ほぼ40歳代を中心に上昇傾向にあり，そして下降傾向を示します。一方，余暇生活は，逆に若い20歳代はずっと高い状態にあり，加齢につれ下がっていきます。そして，50歳代になると逆に上昇傾向にあります。そして，社会活動は20代，30代，40代と加齢につれ上がっていきます。特に，余暇生活と仕事の関係は，表裏一体の関係にあるという見方をしてもよいのではと思います。

そこで，今度は海外との比較を試みているのですが，昨年の応用心理学会の時に発表しましたように，中国のデータが若い人たちが多いこともあって，年齢群を統制してみますと日本の男性の30歳未満と中国の勤労者，同じく30歳未満のライフスタイルは大分違います。日本の場合は仕事の現状認知が1.70，余暇の方は2.33，もっと余暇を楽しみたいとする希望が3.28です。そして，社会活動についても現在の取り組みが0.37，希望が1.24でもう少し社会活動を，ボランティア活動をやってみたいということです。中国の方は結果的に言いますと，日本より現状認知は低いのですが，希望は高く出ています。仕事意識の日中比較は，日本の現状が1.70に対して中国は1.21，希望は日本が1.14に対して中国は2.21で中国がはるかに高いという実態です。女性のデータをみますと男性と同じような傾向にあります。また，男女とも希望が高いのも特徴であります。

次に，中国と日本のライフスタイルの変化を私の方は，実はゆとり問題と絡めた形で調査をしました。このゆとりについては，非常におもしろい結果がありまして，表1の頻度分布から見ていくと，レジメに書いています通り，日本の人たちは経済的ゆとりは「ある」方に回答が傾いているのに対して，中国の人たちは逆に「ない」と言う結果です。これはGDPの関係でも日本と中国を比べますと日本のGDPが高いことからも裏付けられます。一方，時間的ゆとりは日本の男性は「ない」と言う傾向にあります。

表1からもここのところなんですが，時間的ゆとりについては，「余りない」，「非常に乏しい」が極めて高くなっています。中国の勤労者は，時間的ゆとりは日本の男性と違った傾向にあります。そのあたりを考えながら，携帯電話の話を考えていきたいと思います。先ほどの年齢の若い人たち（30歳まで）とそれ以上の人について携帯電話の問題を比べますと，若い人の持っている率が高く，逆に年齢層の高い男性の持っていない割合は20.3％という結果でした。また，年齢層によって用途が違う傾向にあります。私の実態調査では，若い層の男女，逆にそうでない層を比べますと随分違いがあるということがこの中でみられます。例えば，若い層は約95％の人が持っていますが，携帯電話の機能でみると，学生は電話のみの利用が非常に少ないのが特徴です。

次に，勤労者同士の比較を見て考えても電話のみ

表1　ゆとりの頻度分析

日本男性	経済的ゆとり		時間的ゆとり		日本女性	経済的ゆとり		時間的ゆとり	
	N	%	N	%		N	%	N	%
十分ある程度	449	50.2%	324	36.2%	十分ある程度	343	55.6%	321	52.1%
ない、乏しい	446	49.8%	570	63.8%	ない、乏しい	274	44.4%	295	47.9%
未記入	1	−	2	−	未記入	1	−	2	−
合　計	896	100.0%	896	100.0%	合　計	618	100.0%	618	100.0%

中国男性	経済的ゆとり		時間的ゆとり		中国女性	経済的ゆとり		時間的ゆとり	
	N	%	N	%		N	%	N	%
十分ある程度	56	22.4%	109	43.4%	十分ある程度	117	25.6%	210	46.0%
ない、乏しい	194	77.6%	142	56.6%	ない、乏しい	339	74.4%	247	54.0%
未記入	2	−	1	−	未記入	2	−	1	−
合　計	252	100.0%	252	100.0%	合　計	458	100.0%	458	100.0%

＊空間的ゆとり，精神的ゆとり，総合的ゆとりは省く

が男性の若い勤労者は12.2%，メールと電話の機能をもった携帯が46.3%，そしてメール，電話およびインターネットが41.5%，一方若い女性は，電話のみが7.4%，メールと電話が74.1%と言う結果です。一カ月の利用料金を調べますと，男性勤労者は¥5000未満の人がおよそ22%であったのに対して，女性の方は30%，それに比べて学生は10%強と言う実態であります。逆に高い，¥10000から¥15000未満の利用が高く，学生は30%程度を占めています。勤労者の方は男性が少し率が高いですが，それでも17%，女性は10%ぐらいです。

そのあたりを考えて行きますと，これからレジメのところにも書いてあるんですが，携帯電話というものが，勤労者の人たちが余暇生活の方に重点を移行しつつある，というなかでプライベートな形での携帯電話について調査を通じて感じたことを最後にまとめにしたいと思います。

実は，こういう実際に働く人たちの実態のなかで特殊なケースを出しますと，例えば，男性の症例ですが，非常に考えさせられるケースなんです。これは病院に来院された勤労者で会社に行けなくなったある方（NIP研究会，島田修）なのですが，ライフスタイルを調べますと仕事意識の現在の取り組みが数値的に言うと1.27，希望が1.40，そして生活意識について取り組みが1.30，希望は確かに高く3.40，こちらの社会の現状の取り組みは，0.20で0が殆どしていないことからして，殆どしていないという実態にあります。まあ，こういう人たちがこれから増えていくとなると非常に大きな問題になりまして，勤労者のライフスタイル問題を考えていくなかで，

表2　携帯電話に関する実態調査

Q3. 電話での一番多い通信相手

	−30歳男性	31歳−男性	−26歳女性	27歳−女性
一位	社外の同輩 42.2%	家族 63.2%	社外の同輩 44.8%	社外の同輩 37.5%
二位	家族 35.6%	社内・外の同僚 12.3%	家族 31.0%	家族 34.4%

Q4. メールでの一番多い通信相手

	−30歳男性	31歳−男性	−26歳女性	27歳−女性
一位	社外の同輩 57.9%	家族 43.9%	社外の同輩 74.1%	社外の同輩 55.6%
二位	家族 21.1%	社外の同輩 22.0%	社外の年上 11.1%	社内の同僚 22.2%

結局は社会意識，すなわち，社会奉仕活動意識にかなり力を入れていくことにより，仕事と生活と社会のバランスのあるライフスタイルが創造できるのではと思っています。実際，働く人たちのなかでどのような使い方で携帯電話を利用しているかについては，表2の通り若い人たちとそうでない人たちでは使い方に特徴があることがわかりました。

携帯の通信相手になると，男性では30歳までの人たちの第一位が社外の同輩，これは友人でしょうか。ところが，31歳以上は家族を第一位にあげています。女性の方は，どちらも社外の同輩，友人をあげているのです。メールについては，社外の友人，これが若い男性，それから家族です。要するに，男性の31歳以上の方は，電話にしてもメールにしても，家族が第一位，女性の方はメールにしても電話にしても社外の友人が第一位です。

通信内容は男性の若い人たちとそれ以上の人たちいずれもが家族が第一位です。しかも，圧倒的に年齢層が高い男性は家族が多く，女性は趣味，スポーツ，人間関係あるいは結婚，交際などの付き合いに関する電話，メールのやりとりなんです。先ほど申し上げましたようにゆとりの問題を考えていった場合に，日本の，特に勤労者の男性は，30歳までとそれ以上の2群間では，31歳以上が時間的ゆとりがないことがはっきりしました。しかも，携帯電話の実態で携帯をもってゆとりが生まれるかの回答は「いいえ」が日本の男性の勤労者には非常に多く，ゆとりがないことが今回明らかになりました。私は理想のライフスタイルは，社会活動意識を高めることによりバランスのあるライフスタイルの創造が可能であると考えます。

コミュニケーション手段としての携帯電話について，実際1対1，Face to Faceの交流を通してより豊かな人間性の実現が可能になるかと思います。ただ，コミュニケーション手段としての携帯電話を通じて，一時社外の友人とのコミュニケーションを図れて，あるいはストレスの解消に繋がるかもしれないのです。前述の通り，携帯電話については，手段と言うことでそれ自体で全てが済むわけではありません。先ほどの症例にありますように，非常にゆがんだライフスタイルを描く人たちにとっては，むしろ非労働の部分の余暇，社会活動の中での携帯電話でのコミュニケーション，さらに実際のFace to

Face の地域の活動をも含めた働く人たちの実現が21世紀の課題になると考えているわけであります。

非常に限られた時間のなか予定の話を大急ぎでお話をしましたが，後ほど必要であれば付け加える形でお話をさせて戴きたいと思います。ちょっとはしょった形でわかりにくかったかもしれませんが，終わります。それでは，有難うございました。

正田：続いて，濱先生お願い致します。

濱：北星学園大学の濱でございます。私が今日携帯電話のパネリストになったというのは，正田先生からのご依頼で受けたわけですが，昨年応用心理学会で「携帯電話が生活文化に及ぼす影響」というタイトルで発表しております。今日はこういう天候になってしまいまして，一般の方がどれだけおられるかわからないのですけども，できるだけデータとかではなく一般の話的に展開して欲しいというご指示に従いまして，とりわけデータ的なものは一応あるにはありますが極力省いて説明させて頂きます。もし前回の学会発表の分で何か参考になる部分があればということになりましたら，発表論文集にあたって頂ければと思っております。

私も，携帯電話は森下先生ほどではないのですが後発と言いますか，つい2年前に学生から持ってくれ，捕まらないから頼むから持ってくれ，と言われまして，嫌々だったんです。それまで抵抗していた理由はいくつかあるのですが，ひとつはやはりまだ通信費用が非常に高い，コストが高い，ということで，これはもう嫌だなぁと思いながら持ち，そして今に至っております。これはまぁ後でも申しますが，非常に慎重に使っているつもりでいても，私が持っているのは PHS ではなく携帯ですが，月額で¥9,000 くらいの請求がきます。これは使っていて非常に恐ろしいことです。私の専門は，森下先生とは違う領域の産業心理学で，消費行動とかにも絡んでおりますので，そういう観点からも携帯電話のことをこれから若干お話させて頂きたいと思います。

携帯電話は1987年にサービスが始まりまして，当初は非常に高くデカイものだったわけで，あまり普及しませんでした。それからかなりの技術革新があり料金の引き下げもあって，今では固定電話に匹敵するという普及をみせたわけです。まず，大きさは15分の1になりました。これもおもしろいもので，当初携帯電話というのは，自動車電話とか持ち運ぶのにかなり大きなもので，これは社長とか重役のステイタスシンボルとして登場したわけです。香港の笑い話ですが，現実には非常に小さく半分か3分の1になってかばんの中にしまえるようになったにも関わらず，売れなかった。それはなぜかというか，皆さんに見せびらかしたいので大きいのでないと意味がない。こういう時代を携帯電話は経て，今はもう猫も杓子もと言いますか，ほとんどの人が，おそらくこの中でもほとんどの方がお持ちになっていると思います。それで，特に若者，私も次の南先生と多少オーバーラップするところもあるのですが，若者がどういういうふうに携帯電話を取り込んできたか，ということを中心にお話させて頂きたいと思います。まず，携帯電話がもはや電話ではなくなったという側面，このところが第一番目のポイントです。私の目から見ますと，コンビニが我々の世代で言うところの雑貨屋とか小売店ではなくなったというのと非常に良く似ている。電話のコンビニ化というふうにいえるかと思います。それは，例えばどういうことかと申しますと，コンビニの研究を以前に学生が卒業論文でやって驚いたことなんですが，我々の世代ですと，ろうそくがなくなった，電池がなくなった，さぁいつでも開いている，何でもたぶん置いている店だというふうに使う。つまり目的を持って買いに行くということをしておりましたが，今の大学生，高校生はそれをやりません。とにかくコンビニなんです。買う目的なんかはないんです。とりあえずふらっと寄る，という感じでコンビニが使われている。これは携帯電話に関して言いましても，非常に顕著なところがあります。これは昨年度の応用心理学会で発表した，特に女性に見られた行動なんですが，どういう使い方をするかといいますと「暇なとき，つい電話をいじったりする」という使い方をするわけです。これは我々の世代で言いますと，黒電話を暇なときにちょっといじって寂しさを紛らわすなんて，こんなことをしていたらかなり危ない行動です。それはもうありえなかった。電話は電話ですから。しかし今は携帯電話を持ってて，つい触っていまうというのがひとつのスタイルになっている。これは完全におもちゃと化している，チューインガムのようなものかもしれません。例えば，私は最初に契約しに行ったのが，2年ほど前のことでまだ3和音とかがようやく出たという時期で

す。その時に店員がこともあろうに私を見て，「お客さん，これは和音が聞けてですね」とかってそんなことは全く私の選択基準には入っていないんです。着信音が何であるかなんてことは全く関係がないのです。もうちょっと他の留守番電話サービスにどのようにアクセスできるかとか，そのときの料金が高くなるのかとか機能ばかりしか考えませんが，今の若い人に対しては着メロが最新曲でゲットできるというのが，まず最初のヘッドコピーにくるというような時代です。こういう意味で，コンビニが雑貨屋ではなく遊び場になったように，電話は電話でなく遊び道具になったといえましょう。それからもうひとつは，コンビニが我々大人にとっても意味の持つ多機能化をすすめてきましたことと似ています。各種振込みサービスやあるいは予約サービスができるというような，昔の小売店とは違う機能化をもってきた。これは皆さんご存じのようにiモードとか色々と各社がサービスを提供しておりますが，電話以外にも非常に色々なことができます。私は今日北海道にANAで帰らなくてはならないのですが，今日はこういう悪天候ですから，今までしたらANAのオフィスに電話をしなければなりません。しかし，携帯電話なら，ここに来る間の道すがらでも，欠航がどうなっているとか，発着情報が簡単に入手できるのです。というようなことで非常に便利な使い方が出てきております。これもコンビニがコンビニでなく，多機能化してきた過程と非常に似ていると思います。恐らく，将来的には携帯電話は財布の機能を持つであろうという話もあったりして，自動販売機のところで小銭を出さずに，携帯電話でチャッ，チャッとやれば，自分の口座から落ちてジュースが出てくるとか，切符が出てくるとかというふうなことになるであろうと言われています。これは，いわゆるおもちゃ機能ではなく，本当の我々の社会全体の仕組みが，買い物の仕組みとか情報の仕組みとか色々な仕組みが変わるということを意味しているわけだということです。

さて，あと半分くらいの時間は携帯電話がまず個人に及ぼした，人々の付き合いに及ぼした影響について，次に社会に及ぼした影響ということについて話をさせて頂きたいと思います。まず，人々の付き合いに及ぼした影響ということですが，これは携帯電話によって，いつ，どこででも，誰とでもコミュニケーションが図れるということが実現したわけです。このことは，今までの我々の人間社会では，例えばこの場で共有している時間と空間を共有している人々の凝集力と言いますか，仲間意識と言いますか，団結力と言いますか，そういうものが暗黙のうちに期待できたわけですが，今はそれがもうないということです。今はコンパをしましても始終みんなが話しながら，メールを打ったりしています。会議，打ち合わせの時でも，メールが気になる人もいます。ここに居ても心ここにあらず，という感じでいるわけです。札幌にススキノという有名な歓楽街がありますが，そこの居酒屋の出来事で，ママさんのぼやきが新聞に載っておりまして非常に象徴的だなぁと思いました。10人ぐらいの若者が予約して，やってきたのはいいのだけど2時間でそう飲み食いもしないで，それは単なるぼやきなんですが，それからのところが非常におもしろい。まず，「乾杯」というのから入らずにダラダラと入っていった。それで，目の前の人と何か話しているかというとそうでもなく，20分もしたらそれぞれが携帯電話を触ったりして，目の前にいる人と話さずに携帯電話で電話をし始める。そうこうするうちに，座らずに立ってうろうろ歩き出して，飲んでいる人も立ち話をはじめ，立つのが疲れたら廊下に座り込んでしまう。それで2時間たってしまって，別に悪いことをされているわけではないのだけど，どうしたらいいかわからないので，「すみませんけど，もう帰ってくれませんか」と頭を下げたということが書いてあるわけです。これはかなり大きな意味を持っています。逆に言いますと，携帯電話を1台持っていれば，大勢のおじさんに囲まれる車内であっても，自分としては心理的に友人と繋がっているわけです。いつでもアクセスできる，友達にメールできる。従って，不安ではない，寂しくない，孤独感がないということです。これは携帯電話のもつある種の安心剤，精神安定剤みたいなものを人々に与える反面で，その結果として一人の時間が少なくなることを意味しています。これも昨年の研究発表で報告しておりますが，思索の時間がなくなったと。つまり物事を深く考えないようになったということが一つの回答として出ています。つまり一人でじっくり考えるというようなことなく，色々とすぐに何か気を紛らわすために携帯電話でメールをしたり，話すことができるというこ

とです。さてさらに，そういう皮膚感覚の世界がなくなったと同時に，携帯電話は便利な機械であるので，その副作用としてドタキャン，土壇場のキャンセルというのが可能になったということもあります。今までですと，例えば紀伊国屋の前に7時待ち合わせということであれば，なんとしてでもそこに駆け足ででも行かなければならない。ところが携帯電話があればさして相手に待つという不愉快が発生しない間にすぐキャンセルできるのではないか，というように決定に自己責任が付帯しない，と言いますか，軽く約束して軽く変更するというそういうある種のルーズさが発生する可能性があるということです。

さて次に，携帯電話が社会全体に及ぼす影響につきまして，まずひとつはよく言われる携帯電話のマナーの問題です。携帯電話のマナーについて，北海道の地方新聞であります北海道新聞でも色々と議論がありました。記者はあまりにバッシングされているのでそれを庇うような特集をしたところ，読者から逆にたたかれるというような，ちょっとしたことがありました。私の目から見ますと，2つのことが混同されているようにも思えます。携帯電話が本当に原因なのか，携帯電話を持っているからこそ，目立ってきた馬鹿行動なのか，それがわからないということです。これは社会心理学的な観点にもなるのですが，大人は実は恐らく車内での馬鹿でかい声の会話にものすごく不快感を感じていたはずなんです。しかしながら，馬鹿でかい声に注意をする基準やきっかけがどうもはっきりしない。携帯電話で馬鹿でかい声を出されたら携帯電話を禁止しろと。これはアナログでなく，0，1のわかりやすい基準ですから，非常にやりやすいということがあります。これは余談ですが，私の息子の通っている中学校では，コートが，何色はいけないとか事細かに服装のことを検査します。ところが，廊下でこの頃の中学生はませていますから，私達の頃では不純異性交遊という，べちゃべちゃといちゃついているのを，先生は注意ができない。これは，いちゃつくレベルが0，1じゃないからどうしようもないのです。しかし，色ははっきりとわかるという。こういうことがありまして，恐らく携帯電話という以前の問題で，非常に若者の傍若無人な行動に腹を立てていた大人が携帯電話をバッシングの対象にした。しかしおもしろいことに，今若者から発展したPHSや携帯電話が，今ではもう60代でも，70代でも普及してきますと，これは若者云々ではなく，人間性のレベルの問題ですから，もう大人でも平気で大声で使う人も出てまいりました。ついでに携帯電話にまつわって若者の世間が狭くなったという話をいたしますと，若者は元来，色々な世間からの影響を受け，世間を気にしながら大人になっていっていたという，そういう時代もあったわけです。しかし，今ではもうほとんどそれを期待できません。若者は4，5人の限られた人々の間が全ての世間で，その一方で，まわりの大人は電車の中でも，石ころや木でしかないわけなんです。ですから，車内の電話も平気になる。これは別の研究で，食堂の陳列メニューを見るときに10cmぐらいに密着して見る大学生の迷惑行動を観察したことがあるんですけども，世の中はそういうような状態にきています。これは憶測なのですが，携帯電話はどちらかというと，そのような傾向を促進する可能性があるのではないかなというように思っております。

さて最後に産業心理学的な観点から，社会に及ぼす影響を少しお話させて頂きますが，携帯電話の通話料金が今家計に占める割合は恐ろしいものです。これも先ほどの森下先生のお話で，勤労者の25％が¥5,000未満，つまり4人のうち3人は¥5,000以上だと，学生は，10人中，9人が，¥5,000以上だというようなことを考えまして，例えば親子4人で暮らしている，奥さんが持っていられるのもこの頃では当たり前になっていますから，そうしますと月収いくらかわかりませんが，携帯電話だけで¥30,000台というようなものを払いつづけているというのが現状なんです。これは毎月電話が買える値段なんです。あるいはへたをしたら，マンションのローンに匹敵するくらいのものを毎月電話に吸収されているというような構造になってきています。ですから，携帯電話は¥0でも配れるわけです。今の商売は，ただでバーッと配っておいてその使用量で回収するというような商売が，流行っているというか，手っ取り早く儲ける手段だと言われております。ITを景気回復の起爆剤にしようという話がありますが，もちろん携帯電話は起爆剤になりえると思います。と言いますのは，通話料を喜んでいるかどうかわかりませんが，とりあえず払っているわけです

から，そういうふうに吸い上げられている分には，平気で金は動くわけです。これは，起爆剤にはなるだろうと思います。話は少しかわりますが，例えば車も8年で廃車する，家の場合ハード的には35年住める家が，18年やそこらで壊されて全部産業廃棄物にされて棄てられていくという現状です。こういうような，物に依存する経済活動に，日本がずっと加速してくるとやはり資源とか色々な無駄が発生してきますし，環境的にも好ましくない。そういう意味では，携帯電話ならばそれほど資源は浪費しませんから，環境的にも資源的にも非常にいいものだと思えるわけです。そういう意味でも，健全な経済活性化の起爆剤にはなるとは思いますが，しかし先ほど森下先生も多少お触れになりましたが，コミュニケーションはあくまでもコミュニケーションでしかありませんから，こんなものに軸足をおく経済なんていうものは非常に危ないということです。こんなことをいくらしていても，寒さはしのげませんし，腹は膨れません。生活の基盤を無視して，ITの世界にどっぷり軸足を持っていくことの危険性を，今つくづく感じている次第です。以上です。

正田：ありがとうございました。続いて，南先生お願いします。

南：私がぎりぎり話せるデータといいますか，本日の話の土台は，いま皆さんにお配りした紙2枚のものなんです。この紙2枚は確かに「大学生の携帯電話利用の心理・社会的背景」の(1)，(2)となっていて，3年前になりますか，1998年の龍谷大学での応用心理学会大会で発表したものです。それはいいのですが，この研究は何ぞやということなんです。題名はこうなんですが，下の方に脚注がありますように，私個人と，今は駒沢女子大に移られていたんですが，吉田悟先生。吉田悟先生は，慶応ご出身ということもありまして慶応に非常勤として来て頂いて，専任者の私と「人間科学研究法（調査）」という授業をやっているわけです。授業の性質上，教育の密度を考えると，2人ないしは3人担当で，きめ細やかに，ということで吉田さんにも関わっていただくことがあるのです。その1997年度の授業で学生が熱っぽく取り上げたテーマがこれなんです。その授業を取られている諸君が凛々しく若々しく熱気があって，授業でやった調査の結果をどっかで語りたいね！ということになりました。そうこうしているうちに吉田さんが，私より応用心理学会の会員歴が長いこともありまして，「それだったら応用心理学会でやればいいじゃん，学生も一緒になって。京都だし夏休み中だし，応用心理学会は学部の学生も一緒に発表できるスタイルなんだ」ということでした。「それはすばらしい，面白いね」とそういうことで出てきたものです。ところが，学部の4年生のみ，そういうスタイルをとれるということがわかりました。なんで4年生だけ？けち臭いなぁ応用心理学会ってとかも思ったのでしたが，それは，応用心理士の資格とかそういうことの接点で，慎重に常任理事の方々の考えがそういうことになっていることを知りました。いずれにしましても，そういうことで出ているものなんです。

私自身，携帯電話を手にしたのは2年半くらいまえのごく最近のことです。実際はしかし，ほとんど使っておりません。緊急連絡用で向こうから入ってきたものに答えるだけで，自分から押す緊急連絡はほとんどありません。その携帯電話に関わるあれやこれやをシステマテックに研究しているわけでもないのです。

そういうようなすわりの悪いものなんですが，この左側（表3）の方をご覧になって下さい。97年の11月から12月にかけてデータが収集されています。PHSを含むとなっておりますが，その当時の携帯電話と呼ばれているものを，とにかく学生がどのように使っているのかと，それを押さえなくちゃしょうがないということでした。学生の最初の熱い議論は，その当時“ベル友”というような言葉もありましたし，そういう雑誌もありました。今でもあるのかもしれませんが，要するに携帯電話を使っている頻度というか，関わりが深い奴，薄い奴というのは，寂しいとか寂しくないとかということとが関係あるんじゃあーみたいなことでした。いずれにしても何が関係しているのかわからないけど，携帯電話ないしPHSと呼んでいる物をどういうふうに使っているのか，どういうふうな使い方があるのかということです。それがたった3年前ですが，1997年の時点では表3にあるようなこの程度のことだったんです。これは，何を話しているのかは知りませんが，まさに携帯「電話」ですよ！手で電話が動くというようなことがあり，耳と口とが運動している，ようなことです。ところが，去年の秋からいわゆる

表 3　携帯電話の利用の在り方 — 相手が異性の場合－(因子分析/主因子解→バリマックス回転の結果) $N = 107$

項目内容 (数字は、実際の質問紙上での配列順を意味する)	因子負荷量 第 1 因子 (感情伝達)	 第 2 因子 (深層伝達)	 第 3 因子 (用件連絡)
7　うれしいときや楽しいときの自分の気持ちを伝えるため	.77	.24	.07
15　「頑張れ」や「元気出せよ」など、相手を励ましたり勇気づけるため	.67	.20	.20
9　「おめでとう」や「よかったね」など、喜びの気持ちを送るため	.66	.10	.21
4　「今日は疲れたー」といった、とりとめもないメッセージを伝えるため	.64	.34	.06
5　面と向かっては言いにくい悩み事や相談事を聞いてもらうため	.20	.78	.20
6　口に出しては伝えにくいけれど、相手にも知ってもらいたいことを伝えるため	.24	.74	.13
14　その人にしかできない相談をするため	.20	.66	.22
3　相手とやりとりのある“マジ”な会話をするため	.27	.64	.21
11　面と向かっては話しづらい批判や意見をするため	.31	.59	−.02
10　待ち合わせや居場所確認のため	.08	.10	.63
17　仲間うち・サークル・ゼミなどの連絡をするため	−.03	.18	.61
2　呼び出したり緊急の用件を伝えるため	.16	.03	.59
固有値	6.15	1.27	1.01
寄与率 (%)	36.20	7.50	6.00
α係数 (各因子の因子負荷量を枠線で囲んだ項目の)	.83	.85	.59

i モードが出てきて，この公開シンポジウムの案内にも「i モードが革命的に」というような表現がありますが，濱先生の言葉では，もはや携帯「電話」ではないと。では，コンピュータとも言えず何なんでしょうね？まず我々は，携帯電話と仮に呼んでいるけれども，今の時点の携帯電話と呼ばれているものは，人間にとってどういう意味があるのかを考える前に，現時点でそれは一体なんであるのか，そこのところを整理してみなくてはならないと思うのです。97 年当時では，手があって，耳があって，口が，ということです。今や恐らく，画面があって目があって，キーボードがあってそれを押してと，目と手が大きく関係している何かです。ほとんどが，耳と口との関係は稀薄化したような気がします。私は i モード付きのを持っていながら，今でも手と耳と口だけなんですが，3 年間でこの程度の違いがあるような気がします。ですから 3 年前の調査実習でも，携帯電話の利用の仕方というのはここにもありますように，たかだかこの程度のことで，それを因子分析にかけてみますと，感情伝達/深層伝達/用件連絡と命名しました 3 つの因子が抽出されてきました。感情伝達というのは，おしゃべりです。そこに何かどうしてもしなくてはならないという用件はない。それに対して，第 3 因子の用件連絡というのは，何かをとにかくして，そこであることを処理しなくちゃならない。それを電話連絡し合っているということです。そして，深層伝達という怪しげな？言葉は，おしゃべりと用件連絡の中間的な事態なわけです。ここにありますように，相手とマジな会話をしている，面と向かっては言いづらいことを電話で話している，例えば好きだっていうことを伝えているとか。感情伝達というのは，まぁ恐らく何かの面識があって，携帯電話があって，対面的な事態ではあんまりやらないなんかをしちゃっているというか，面と向かってはしないおしゃべりを電話があってしている，こういう感じです。これを見てお分かりのように，感情伝達とか深層伝達とか呼んだものが巨大にふくらんでいて，用件連絡というのは非常にか細い。

若者の 97 年当時の，家にある固定された電話ではなく，携帯電話あるいは PHS の使い方，あるいは携帯電話との接点は，要するに，同じような年齢ゾーンの若者同士のおしゃべりということです。その当時は，若者その人個人にとってのおもちゃ的な機能を携帯電話はそれほど持っていなかった。最近は，一生懸命押してますよね。私は自分が i モード付きの携帯電話を買って，膨大なマニュアルを見る前は，彼らが何をやっているのか，たぶん何かゲームでもやっているのだろうと，このようにしか思っていませんでした。e-mail 機能が携帯電話に入り，読んでパカパカと打って返してということになると用件連絡的なんですが，表象的にはそうなんですが，

e-mail の文章の中身が問題ですから。文章の中身を見ても多分，それをしないとはたとその人の個人生活，社会的機能が止まってしまうようなことじゃないような内容だと思うのです。しかし，データがありませんから，非常に「中年のおじさんの“カングリ”的」な話かもしれません。私は気になりまして，学生にすこし聞いてみました。自分のゼミの学生やその他の知っている学生に聞いてみたのですが，私のそういう意味での非常にラフな“インタビュー調査”によりますと，いわゆるここで言います，用件連絡的な e-mail はほとんどない。ただし，携帯電話での e-mail は，電話交信よりも，また，通常のパソコンネットを通す e-mail よりも，値段がものすごく安いのです。それでも，私はほとんど携帯では e-mail を使っておりません。おじさんたちも慣れれば，手先の器用さの問題ですから，いかようにもなると思うのですが，そこまでして送るメッセージコンテンツがないんだろうなぁと思います。しかし若者にはあるのです。ただし，それは「用件」じゃない。「遊び」とはいいませんが，「どうでもいいこと」がいっぱいです。そういうことで，まぁ“貧乏暇なし”という言葉がありますが，ここにあんまりヤング・フレッシュという年齢層の方をお見受けしないので言っちゃいますと，“貧乏暇あり”ってことなんです。貧乏っていうのはきついですけど。

つぎに，お配りした紙の右側にあるデータ（表4）ですが，感情伝達と呼んだものや深層伝達と呼んだもののそれぞれをより多くやっているというのはどのようなことが関係しているのか。つまりそれぞれの利用行動の規定要因です。ここでは，送信の相手が自分と同性の場合，自分と異性の場合とに分けて分析しております。想定された規定要因（独立変数）というのは，ここにありますように，個々人の属性，それから色々な心理的な変数（孤独感とか，その孤独感がどこからきているのかとか，俗にいうソーシャルサポートで，父親から，母親から）で30変数くらいあります。そういうようなことのステップワイズの重回帰をかけていて，それぞれの従属変数に対して一番すわりのいいような組み合わせ，決定係数が一番高くなる組み合わせ，そういう関係にある有意な独立変数は何かということでした。分析の結果を見ますと，なるほどね，というのもありますし，何だかわからないけどとにかくそういう事実には違いない，というのもあります。ここから出てくる結論も，若さがあって元気があるよという言い方もあるのですが，貧乏暇なしではなく貧乏暇ありかなぁと。濱先生もおっしゃったように，学生は親のすねかじりの部分が多いですから，一番の規定要因はお金なんです。学生たちの行動パターンを大きく

表 4　携帯電話の使用/利用の在り方を規定するもの（ステップワイズ分析の結果，表中の数値は有意な Beta 係数）$N = 107$

独立変数	携帯電話の使用			携帯電話の利用の在り方			
				相手が同性		相手が異性	
	使用期間	送信回数	受信回数	感情伝達	深層伝達	感情伝達	深層伝達
携帯電話の送信回数	—	—	—			−.34**	.25**
携帯電話の受信回数	—	—	—			.48**	
携帯電話の利用の在り方（感情伝達：相手が異性）			.27**	—	—	—	—
孤独感原因（自己信頼の欠如）					.22**		
（人間関係不全）				.26**		.24**	
（社交性の欠如）			−.28**				.23*
（充実感の欠如）					.31**	.24**	.30**
社会的支援（異性の友人との間：時間共有）						.29**	
（母親との間：時間共有）				.26**			
（父親との間：時間共有）	.25	.28**					
自己受容（感情的傾向）		−.33**	−.20*				
年齢	.31**						
兄弟の数	−.20*						
サークル・クラブ（1＝活動，2＝その他）							−.20*
学年					−2.0*		
決定係数（R^2）	.22**	.19**	.19**	.13**	.27**	.26**	.23**

** $p<.01$，* $p<.05$

バウンドしているのは，自分が自由に使えるお金の範囲のなかでいくらまでそういうことができるか，その人のパーソナリティーとか寂しいとかの心理社会的事態というのではなく，お金なんです。そのお金の制約のもとで，今あるiモードであろうが，個々の携帯電話がどれだけの機能をもっているか，その中のどの機能を手持ちのお金の制約の中で選んでいくかという行動のように思います。ですから，iモードでe-mailとかが積極的に使われるのです。大学の講義中でも一生懸命押している人がいますよね。用件連絡する必要もないのだけど，なんとなく使っちゃおうと。どうしてかというと，音は聞こえないし口も開かなくてもいいし，先生の話を聞いてても面白くもないしで，気分転換（？）もかねてか，下を向いて一生懸命やってる。こういうのは，どんどん広がっていくと思いますね。それがその人の成長や発達にとってどういう意味を持っていくのか，また濱先生がおっしゃったように，そういう利用行動が日本の経済の効率性とか，日本の国自体の行く末ということとの接点では，どうなるのかなぁと私も大いに気にはなります。濱先生がおっしゃったように，一家で大体¥30,000のお金を携帯電話に投入しているということも，どういうことを意味しているのだろうかと。心理学のゾーンからは大きく離れるような気もするのですが，そのあたりのことを検討してみるというのは，すごく重要じゃないのか，そういう気がしています。

3年前のデータで，しかも私個人がシステマテックにやっているという研究の流れの中での話でなくて大変申し訳なかったですが。システマテックではない問題提起で本人も気になって仕方ないのですが，ひとまず，ここで終わらせたいと思います。

正田：では，続けて休憩に入る前に，石田先生お願い致します。

石田：早稲田大学の石田でございます。「携帯電話と自動車運転」ということで，人間工学会のシンポジウムで既に話をしたのですが，正田先生から同じような内容でいいから話をしろということで，少しデータも含めてお話ししたいと思います。つい3年ほど前，この実験をやっているときに，ガソリンスタンドに寄ってガソリンを満タンにした時に「くじを引いてください」と言われ，「くじって何ですか？」と聞いたら「100円玉のつかみ取りか，携帯電話が当たります」と言われて，エイッってやったら「あっ，はずれです」と言われたんです。「はずれの賞品は何ですか」と聞いたら，携帯電話。ただでもらったんです。その携帯電話を途中でなくして，なくした次の日に電話で，「携帯電話いりませんか」と言われて，「ちょうどなくしたから欲しい」と言ったらタダでくれるって言うので，何か携帯電話ってタダでもらえるものなんだなぁと，ビックリしました。

自動車が発明されたときに，これは将来大きな問題になる，人間は速度感とか距離感とか悪いのに，こんなものを作って大丈夫かと心配した人もいたわけですけれども，移動電話が出来たときにも同じ事を心理学者はしきりに言っているわけです。これは非常に将来問題になると，ブラウンたちが問題を提議しています。当時，初めに自動車電話が出来たときは，先ほどのお話にもありましたように非常に値段が高い，それから，自動車電話というのは最終的に250万台程度普及したのですが，運転席の横に設置していたわけです。そうしますと電話が掛かってきた時にすぐに取れる。ということで，場所がわかっているとすぐに対応ができる。まぁ人間の特性なわけですが，そういうことであまり事故がなかった。このいい例はタクシーのタクシー無線です。タクシー無線をやりながらぶつかったというのをほとんど聞かないです。これは取る場所がわかっている，比較的話の内容もどこに配車しますなど，わかっている内容が多いので，割合と事故が少ない。それに対して，携帯電話ではもっと色々な利用をされてしまう。携帯電話を持って自動車を運転している場合の一番の利点は，1960年代の終わりにハイウェイパトロールが事故を通報してくれるから，非常にいいのだと言っていることです。この件に関しては日本の現状も同じで，交通事故報告の数十％が携帯電話からなされている。困るのは通報者がその場所をわからない。パトカーや救急車が行けないという状態があります。悪くはないのですが，効果は多少しか上がっていないということです。運転中の携帯電話は，諸外国でも問題になっており，色々な研究がおこなわれています。実際に実車でやったり，シュミレーターでやったりしておりますが，ハンドル操作がおかしくなるのではないかとか速度が遅くなってしまうとか，情報収集力，例えば前を見たり

ミラーを見たりする能力がおかしくなってくる。実際に，運転負荷が高くなって精神的な指標を取ってみても，少しおかしくなるんじゃないかというデータが出てるわけです。

今から3, 4年前になるのですが，どうもこれは大変だということで，安全運転センターがこれに関して日本の国内で規制をかけるかどうか，バックデータを取りたいということで最初予備実験をやり，どうもこれは反応が遅れそうだということがわかった。では実験をきちんとやってみようということで，実際に実施してみたわけです。実験の目的というのは，携帯電話を使ってどれだけ，反応が遅延するかどうかとか，車速がきちんと維持できるかどうか，車間距離を維持できるのか，そして注意配分はどうなっているのかということで，これは会話による負荷の問題です。それから携帯電話で一番事故が多いのは，架電着信時です。実際の事故調査データなどを見てみますと，電話器を，シートの上においてある，あるいはかばんの中にいれてあるということが多いわけです。そして呼出音が鳴ると，必死に取ろうと思って手を伸ばしたり，思ったところになくてついそこを見てしまう。その間に情報処理が遅れて，事故になってしまうというケースが多いわけです。極端な例ですが，呼出音が鳴ったとたんにカーブがあったんで，コロコロコロっと，携帯電話が床に落ちてしまった。でもカーブを曲がりながらそれを手を伸ばして取ろうとしたドライバーがいて，ハンドルの下に顔をやって，全く前を見ていなくて，そのまま田んぼの中に転落してしまった。また，携帯電話使用時のワークロードの指標として，最近ハンドルのふれがかなり注目されているので，これで問題点を検討しようということになりました。そのほかのデータは，アクセル踏力，エンジン回転数など取ったりしました。実際に実験をやったのは，勝田にある安全運転センターの中央研修所で，そこには，高速周回路と市街路を模擬した道路と多目的な試験路などありまして，その市街路と多目的試験路を使って実験を行いました。注意の配分を見るということで，視線の移動時間と移動回数を見たのですが，これはウインドー上にビデオをつけて，ドライバーの顔を撮り，目をワンフレームずつ，どこを見ているかをカウントしていきました。実験走行は前方に先導車がおり，その後に被験者の車が付いていて，あまりそれが遅れないように，もう1台が後ろから追っていくというものです。先導車のブレーキランプがついたら，すぐに自分のブレーキを踏んでくださいというインストラクションを与えています。ブレーキ反応時間の取り方としては，前の車のブレーキランプのオンによってブザーを鳴らして，そのブザーを電気的に信号に変えて後の車に送って，後の車がまたブレーキを踏んだ時にブザーが鳴って，それをAD変換していくというやり方をしています。車間距離は，車間距離計を使って測定しています。それから，計算問題を作業負荷として与えました。色々な負荷のかけ方がありますが，これは1桁プラス2桁の加算問題です。予備実験で色々な会話をやったのですが，皆さんすごくうまく出来てしまい，あまり負荷にならないのです。このへんは，今後の課題です。それから，ハンドルのふれを計測すると同時に，パイロンにぶつかってしまうのかということを目視で計っています。それから，後はアンケート等をやっております。被験者は50人です。大体1人の被験者が，実験が終わるのが1時間か1時間15分くらい。最初に予備走行して慣れてもらって，その後4つの運転モードがあるのですが，ランダムに順番を変えて運転をしてもらいました。(図3)

この図は反応時間の結果です。通常運転というのは何も負荷がない場合です。カセット使用とは実際にはカセットの中に同じニュースを入れて，そのニュースを聞いてもらって後でそのニュースの内容を口頭で回答してもらうものです。それから，携帯片手というのは左手に携帯電話を持ちまして，電話

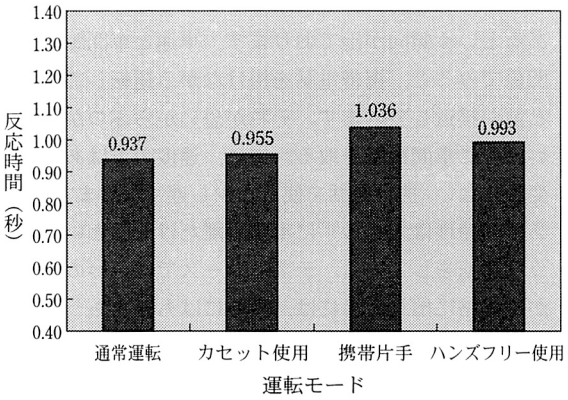


図3 運転モード別の先行車のブレーキランプに対するブレーキ反応時間

が掛かってきたら取って加算問題をずっとやっていてもらうというものです。それぞれの条件で，大体40問から50問の回答を求めています。ハンズフリーというのは，自動車工業界が推奨しているハンズフリーキットですが，右のミラーのところにスイッチがあって，それを押すだけで着信ができるという便利なキットです。ただ，これに関しては色々なハンズフリーキットがあって，推奨キットが必ずしもいいのかどうかわかりません。かえって初めて使うので，そこにうまく命中しないとかそんな問題点もあったりします。この反応時間を見てみますと，通常運転，何も負荷がない場合には平均が.937です。そして，カセット使用が.955，携帯片手ですと1.036，ハンズフリー使用では.993秒です。携帯片手の場合が一番遅く，統計的な有意差があります。この時に問題となるのは，うんと遅れるような被験者がいるのかということです。1秒以上反応時間がかかってしまったというのを増長反応として考えてみますと，携帯片手の場合は発生率が50％とかなり高くなります。ですから，データの半分以上は1秒以上かかっているということになります。実際に，ブレーキ反応時間は非常にいい事態でやると平均値で.7秒です。予期しない事態ですと1.2秒とか2秒近くかかることもありますが，1秒以上かかるのはかなり遅いという気がします。

車間距離は有意差はありません。ただ，被験者のうち10人が，中央研修所のインストラクターで非常に運転がうまく，残りは普通のドライバーです。インストラクターはどの運転モードでもあまり車間距離は変わらない。しかし，我々一般のドライバーは，そういう時には車間距離をどうも延ばし気味であるという傾向が出ております。車速と車間距離の関係でみると，携帯電話を掛けながら運転していると前が接近してきます。それが恐いからぶつからないように車間距離を取る。逆に，速度の方はあまり変わらない。携帯電話を使うと少し遅くなりますが，あまり速度は変わらずに車間距離だけ取るというような運転をしている。テストコースではいいのですが，実路に出たときには，実際にはもっともっと前の車との走間関係があるわけで，どんどんどんどん追いまくられてしまう。そうすると，やっぱり車間距離を詰めなくてはいけない。非常に危険な状態になってくるわけです。リスク保障としても，危険な運転状況になるわけです。

表5　運転モード別の機器に対する視線移動時間

運転モード	平均値	標準偏差	最大値	最小値
カセット使用	1.05	0.636	2.83	0.0
携帯片手	1.90	0.564	3.33	0.7
ハンズフリー使用	1.66	0.616	3.17	0.6

次は，電話が掛かってきて着信して取るという操作の場合についてお話しします。カセット使用というのはステレオのカセットテープを入れる操作です。携帯片手というのは，携帯電話が掛かってきたら取って，着信ボタンを押すということです。ハンズフリーは，掛かってきたらハンズフリーキットのボタンを押すということです。表5を見ますと，明らかに視線移動時間が，携帯片手の場合は長くなっています。1.9秒，ほぼ2秒です。2秒というのは，脇見などの限界で，2秒を超えるような注視をしてはいけない。できれば1.2秒の中で収めていきたい。そう考えると，携帯電話を片手で取るというのは，非常に危険な行為であると思います。視認回数は，携帯片手の場合は大体2回ぐらいが多く，ハンズフリーの場合は3回と増えています。これは，携帯電話を使っている人が半数以上いたのですが，実験当時ハンズフリーはまだあまり普及していなくて，初めて使うためスイッチを見てしまうのです。それでちょっと多くなっています。ハンドルのふれは，携帯片手運転が一番大きい。最後に，設問に対する答えに関しては，それほど大きな差にはなっておりません。

こういうデータをまとめてみますと，まず(1)として機器を操作する時の視線移動時間は携帯電話で平均が1.9秒，大体2秒近い脇見が生じています。ハンズフリーは1.66秒，これも決してよくはないのですが，携帯電話よりは多少ましです。カセットを操作する時も1秒。先日もカーラジオをチューニングしていて小学生の列に突っ込んだという事故がありましたが，この程度のことでも事故が起こるわけで，その倍の時間というのはかなり問題があるというわけです。(2)としましては，会話したり，ニュースを聞いたりしながら追従走行していて，前の車のブレーキに対する反応時間は，携帯片手が一番遅く，ハンズフリー，ニュースを聞きながら，通常運転の順になります。それから，車速の方はやはり携帯片

手が一番遅くて，ハンズフリー，ニュースを聞きながら，通常運転の順。車間距離は，携帯片手が一番長くて，ニュースを聞きながら，通常運転，ハンズフリーの順となります。携帯片手で会話していると反応時間が遅くなって，さらに，速度が遅くなって車間距離が長くなるということです。この実験では前のブレーキが点灯するわけですが，もっと減速度を小さくして，アクセル解放するぐらいの減速度，そういうのに気がつくかどうか，そういう事故形態も多いので，その辺がまた問題になってきています。視線移動とか視線の移動回数を見ますと，注意の配分がわかるわけですが，正面以外の視線移動時間が携帯片手だと非常に少なくなってきて，情報処理がうまくいかない。それから，視線移動の回数もどんどん減ってきてしまう。どうも正面をジーッと見ているというような結果が出ております。最後の進路の保持特性ですが，携帯片手が一番ハンドルのふれが大きくなる。他の研究者も運転パフォーマンスが低下した結果を指摘しています。一昨年の11月に携帯電話を運転中に利用することが規制されました。それまで年間2,000数百件，1年間で25人程度の死亡者が出ていたのですが，11月は直前に250件くらいあった事故件数が突然50件くらいに減っております。ただ，その後の昨年度のデータが収集されていませんので，その後どのように推移したかということは，その後はわかっておりません。携帯電話に関しては，できるだけハンズフリーを使うようにということですが，会話中に関してはハンズフリーでもかなりパフォーマンスに影響を与えているので，できれば使わないに越したことはないと思います。ただ，実際に社会的に見ますと，学生が携帯電話を使って何をしようが私は勝手だと思うのです。先ほどお金出しているからいいじゃないと，そうだと思います。人に迷惑掛けなければ。ただ，私の知り合いの営業マンは，携帯電話がなくなってしまうともうほとんど営業できないと言っています。ほとんど運転しながら商売しているので，そう簡単に携帯電話を運転中危ないからといって使わないわけにはいかない。ただ，その場合できるだけハンズフリーにして下さいとすすめています。最近町を歩いていますと，規制されているにもかかわらず，まだまだ平気で携帯電話を掛けながら運転しているドライバーがいる。本当は，会社として禁止しているはずの会社の社員なのに，宅配便の人が携帯電話を掛けながら運転しています。事故さえ起こさなければ悪くないというそういう意識が多少あるのではないかと思います。ですから，確かに携帯文化というのはこれからどんどん発展するでしょうが，他の発展はともかく，自動車運転中は危ない。新しい色々なサービスを作っている人たちと話すと，いかに新しいサービスをどんどん進めるかという一方的な話が多いのですが，すると自動車を運転しながら処理するべき情報がどんどん増えてしまう。なんで，そんなの自動車を運転しながらやらなくちゃいけないの，止まってやればいいじゃないと言ったのですが，利用する人にとってはその利便性が優先してしまうということです。人間工学的な視点からは，かなり問題があるのではないかと思います。時間がなくなって，内容的には不十分かと思いますが，以上で終わらせて頂きます。

正田：ありがとうございました。それではここで，7，8分休憩を取りたいと思いますが，休憩後に指定討論者の方にコメントを頂きたいと思います。

— 休　憩 —

正田：4人のご発表に対してコメントを頂いた後，フロアーの皆様方と話し合いを持ちたいと思います。それでは，最初に向井先生お願い致します。

向井：中京大学の向井でございます。本日のシンポジウムにあたりまして，企画者の正田先生の方から，高年齢者の技能に関する研究をやっているようなので，その立場から少しコメントをしてもらえればというお話がありまして，お引き受けしたような次第です。4人の先生のお話をお聞きいたしまして，当然のことながら，機器としての携帯電話の扱い方とか，生活上での役割，利用可能性とか適応，不適応とか，まさに応用心理学のシンポジウムにふさわしい話の流れになっていると思うのですが，その流れにうまく乗りきれるかどうかわかりませんが，私なりに今回のテーマに触れたコメントをさせていただきたいと思います。

これまで，私は，単純反復作業の継続遂行のプロセス，技能の形成について研究を続けてきましたが，最近それらのデータを高年齢者のパフォーマンスと

比較することによって，高年齢者の行動特性の理解へと研究を展開させているところです。高齢者の行動特性としては，一般的に，身体的機能の低下に伴って，動作，行動がゆっくりになるとか，既存の経験に頼って新しいことを覚えることに困難を感じるとか，ワンパターンな行動が目立つといった点が指摘されています。私の研究でもほぼ同じような傾向が伺えますが，個人差が大きいとか，課題の種類の違いによって新しい技能を獲得する所要時間にばらつきが大きいとか，練習に要する時間は必要だけれども，ほとんどの作業では，時間さえかければ学生と同じくらいの技能レベルに達するといった点にまとめることができます。「ほとんど」と申しましたのは，これまでキー入力の作業を高齢者に課した場合に，どうしても入力スピードが追いつかずに，被験者としてお願いした半日中ずっと同じレベルで作業して帰って頂いたというケースがあったものですから，みんながみんな練習さえすればある程度のレベルにと達するということではないのかもしれないとも考えました。そんな状況の時に，キー入力に関してハード面の改善と言いますか，電卓程度のキー操作で，これまでのパソコンのキーボードと同じような入力ができるという装置を発表したメーカーも現れまして，キーを押す回数は増えるけれども，使用するキーの種類は少なくなるわけで，この装置の使い勝手がどうなるのか，高齢者にとって学習の負担がどう変わるのかということを研究しようとした矢先に，今回のテーマの携帯電話が予想をはるかに上回る速度で普及していったという現実があるわけです。しかもポケベルが進化したものとか，単に電話をかけるだけといったような固定電話の移動型とか，パーソナル化といったような意義をすっとばして，メールのやり取りとかニュースの発進の手段とか，つまり文字入力装置として，特に若者は手のひらに乗せて文字を入力する能力をみんなが勝手にマスターしてしまったわけです。こうなりますと，高年齢者の側から言いますと，またまた置き去りをくらったということになるんじゃないかと思ってしまうわけです。先ほど挙げました，高年齢者の行動特性からみましても，装置が小さくなるのは操作面からみても，困難度が増しますし，当然視覚機能は衰えますので，ボタンの上の文字は覚えてしまうとしても，ディスプレイ上の文字自体は見えにくくなるということが考えられます。事実，携帯情報端末の見やすさという研究も少しやってみているのですが，液晶画面が小さく暗い場合には当然見にくくなります。表示されるフォントが小さくなりますと，見にくく読み取りに時間がかかるし，読み取るミスも出ます。年齢が高くなれば，この傾向はさらに顕著になります。したがって，今日のシンポジウムのタイトルに沿う形で私が問題にできるのは，高齢者はこういった情報化の波についていけるのかといった不安と，さらに言えば，ついていかなければならないのか，ついていく必要が日常生活を送る上でほんとにあるのかといったことになると思います。携帯電話の入力装置部分が音声入力になるとか，情報表示も音声によって表出できるようになり，ハード面の改良，ソフト面のサポートといった飛躍的な機能の向上があれば別ですが，少数派のニーズへの対応は，やはり一番後回しになるという現実がありますので，そのあたりに重要な問題もあるのではないかと思います。

そこで，本日話題を提供して頂きました４人の先生方のお話の内容との関連ということになるのですが，まず，森下先生には，勤労者のライフスタイルの変化，意識の変化というものを，性別，年齢別の違いでご紹介頂きました。仕事という面で現役を退かれた高齢者の場合，社会，生活面への意識と携帯電話の必要性は，どの程度なんだろうということについて考えさせられました。続いて，濱先生のお話の中には，携帯電話はもはや電話ではなく，なんとなく触っている遊び道具だ，おもちゃだという指摘がありましたが，今の高齢者がコンビニをどの程度利用しているかということは別の問題としましても，お金もある，時間もある，しかも，携帯電話がどのように受け入れられるか，高齢者をターゲットにした市場というものが本当に考えられるのかという疑問をもちました。それから，南先生のお話の中に，これも同じく携帯電話はもはや電話ではない，用件連絡の道具でもないという指摘がありましたけれども，もともと目と耳のコミュニケーションに慣れて無駄な長電話はするなと，子どもたちに注意し続けてきた今の高齢者の方々に，もはや用件連絡の手段でない携帯電話を受け入れられる可能性がどの程度あるのか，といったことを考えてみました。それから，石田先生のお話の中には，携帯電話を使用

する時の負荷と注意配分という視点から実験で確かめてみた。というご紹介がありました。また着信時に事故が多いのだという指摘もありました。着信音が鳴ってかばんの中からごそごそごそと携帯電話を取り出すおばあさんの姿をバスの中で見たり，着信音が鳴って，始めは他人ごとのようにじっとしているのだけど，あぁ自分だったとしばらくたって取り出す人との中には，結構お年寄りの人が多いといったこともありますので，もはや電話でない携帯電話を利用するメリットというものが，高齢者にどの程度あるのかといった点について考えさせられました。今日の話の中にもありましたが，携帯電話があくまでもファッションだとか，求める情報が自分にとってどれほど重要かといったこととは無関係に，情報を求めるといった行動傾向が，現代の社会生活における行動傾向の主流になってしまえば，それはそれでその現状を認めるしかないかもしれませんが，携帯電話や情報端末から情報を求めるということが社会生活を送る上で必要不可欠，これができない人は社会に遅れを取るんだということが，もし現実になるのであれば，「情報弱者」という言葉があるのかどうかわかりませんが，誰にとっても馴染みやすい，より使いやすい工夫がハード面からなされていかなければならないのではないか，という感じも致します。そこまで弱者に配慮する必要もないじゃないかとか，情報の洪水に押し流される反動で，やがて携帯電話も廃れるかもしれないとか，いやいや，そんなことはないんだとか。そういった点も含めて，高齢者の問題との関連で先生方に補足的な説明をお願いできたらと思います。これで指定討論者の役割がつとまったかどうかわかりませんが，感想を含めてコメントさせて頂きました。以上でございます。

森下：お答え致しますと，先ほどのデータをお見せした中で，やはり仕事意識，余暇生活意識，社会活動意識，これが年齢によって随分違ってきます。特に高齢者，定年退職後の問題を考えますと，仕事意識ががくっと除かれるわけです。当然そうなりますと，余暇生活意識，社会活動意識の拡大が図られる。仕事意識は女性の皆さん方が男性と比べて低いことを考えると，現代の働く女性の方が高齢者に達するときには，今の姿の方向で携帯電話を使うのではと考えています。ただし，メールについては先ほどの調査で技術的な問題として，もっと大きくしてほしい，要するに文字が小さくて見えないとか，あるいはもっともっと例えば，いろいろな家の家電管理ができたらよいとかなどの情報の要望を聞いています。また，TV なんかもぜひみたいとの希望があるのです。

料金問題については，勤労者の方々は殆どが料金を安く，やはり料金問題は学生が勤労者よりはるかに贅沢な使い方をしているのに対して，高齢者の方々に聞きますと年金との絡みもあって携帯電話に要する支払う金額は限界があるようです。私は，勤労者の皆さんも社会活動意識を拡げることによってバランスのあるライフスタイルを描くことができる，それが人間にとって非常に大事であることを言いましたが，同じように高齢者の方々が，会社を離れ，そして生活，家庭だけでなく，社会活動という別な軸の枠組みにシフトを置いていった場合に，当然，携帯電話あるいはメールに関わるところの活動が非常に強く出てくるのではないかと思います。そんな意味で，利用の仕方そのものも高齢者の皆さん方にとってはこれから一つのテーマになりますし，私は高齢者にとって色々言われています孤独の問題も含めて，むしろ携帯電話の利用によって高齢者自身が豊かな生活と言いますか，あくまで通信手段，コミュニケーション手段の一つなんですが Face to Face，1 対 1 の人との交わりの前提で携帯電話がさらに発展していくことを希望しております。コメントになるかどうかわかりませんが，一応そういうことでございます。

濱：実は，私はカシオの G ショック風の今の携帯電話で 3 台目なんですが，1 台目の時は先ほども言いましたように，学生がどうしても持ってくれというので，ボケ老人徘徊防止といいますか，対策用に出された“安心だフォン”を持っていました。これは，登録している 3 箇所にしか電話を掛けられない。ボタンも 3 つしかなく，自宅，大学，あと実家にしか掛けられないのですが￥980 ですむという，非常に安いタイプです。こういう機能を絞った形で，老人福祉の上で活用するというのもひとつだと思うのですが，先ほど申しましたように，電話以外の，情報の検索とかそういうような機能として，若い人は使っている。しかしながらよく考えてみますと，出歩くにもどこに行くのもめんどくさいし，足が

弱っているという人こそ，こういうような機能をもっと使いこなせるようになればいいと思います。これは電話を超えて，いわゆるインターネットの世界でも同じことなんですが，幸いなことに，今携帯電話が急速に世代を超えて発展してきたのは，電話であったからだと思います。それは例えば，「携帯パソコンとしておしゃべりもできるよ」という切り口なら，恐らくお年寄りの方々は持たなかったと思います。今のお年寄りにとって，私の独断なんですが，入っていけるのはテレビと電話までだと思っているのです。そのテレビと電話を切り口に，どのようにして，もっともっと本当にそれを必要としている人々を抱き込んでいけるか。これは単に商売という意味ではなくて，そうすることによって恐らく生活が豊かになるだろうということから重要なことだと考えています。しかしながら，まだまだ現状はダメだと思います。ヒューマン・マシン・インターフェイスの側面，ペーパー・ウェアの側面，どちらも硬すぎて，先ほど南先生がおっしゃったように，たかだか携帯電話をマスターするのに何が悲しくて1.5cmのマニュアルを全部読まなくてはならないのかと，お年寄りの方はそう思いますから，そういうようなことならちょっとまだ難しい。これはお年寄りに限りませんが，車椅子の方々もおっしゃっておりますが，そういう世界は我々いわゆる社会的弱者と今まで言われていた人々にこそ光のあるものでなければなりません。それがITディバイドみたいな新しいハードルが生じ，それができるかできないかで受けられる恩恵が変わるということが問題だと思うのです。せっかく携帯電話という電話からの切り口ができたので，これをどのように生かすことができるかということが，今後の老人福祉とか老後の豊かさということに関わってくるのではないかと思います。

正田：ありがとうございました。南先生，お願いします。

南：まず，携帯電話機そのものについてなんですが，必要な時にダメ！というのが結構あって，これをどのように考えればいいのだろうかと，利用者の立場としては，私個人の場合すごく悩ましいです。というのは，携帯電話の最大の利点は，固定電話と対比して，移動できてとにかくつながる。逆に，おしゃべりであろうが緊急連絡であろうが，つながりがとれなくなったら何の意味もない。でも，そういう瞬間って結構あるのです。私は，山中をぶらつくというか山に行く人間でして，昔はトランシーバーを使いましたけど，今は携帯電話をつい持っていきます。使おうと思って，ふと見ると圏外だったりして，それでしょうがないなぁと。それと，PHSは地下街，地下鉄ではつながりますが，携帯電話は基本的につながらない。ですから，お話した調査実習の当時，学生は値段もより安いのでPHSのほうを持っていました。通信がつながらない，圏外みたいな状況，そのへんが気になるところです。

それから，去年の夏，私の母が入院しまして，84歳ですから高齢者です。まぁ緊急の連絡もありますし，ここでいう感情伝達というのもあるのですが，病院ですから使えない。心臓バイパスをしている人もいるからです。ごもっともなんですが，そうなると携帯電話なぞ何の意味もない。コストの問題ももちろんあるのでしょうが，そういう電話機を作っている人々というとおかしいですが，企業体なり関連する国の行政機関なりが解決する気になりさえすれば解決可能な問題なのではないんでしょうか？とにかく，必要な時にこそダメっていう局面がある。そして必要であっても，若年者はいいのだけど高齢者はダメとか。例えば濱先生がおっしゃったように，使い勝手がものすごく悪いとかそういう問題もどこかで解決しなくてはいけない。そういうことです。

先週たまたま，NHKの“おはよう日本”という朝の番組で3日間連続「携帯電話のこれから」という特集があって，私，こういうこともあって一生懸命見ていました。近未来の携帯電話は，明らかに何かのコントローラーになってきますよ。例えば，職場から家に帰る前にこう押すと，帰るとお風呂が沸いているとか。それがないと駅のゲートが開かなくなっちゃうパスみたいにもなるらしいです。こうなってくると，先ほどのコメンテーターの向井先生がおっしゃったように，年齢の対応性というかそのへんの問題が起こってくると思います。例えば乱暴な話ですが，若者が文面的でなくバーチャルな時空間の中で友達と交わって，携帯電話を見ながらでも，そういう中で育っていく。兄弟が少なくなってきてとかそういうことを考えると，彼らの発達上には一定の機能があるのだろうなぁと，思います。それから，高齢者になって，寂しいとか，孤独感とかの接

点とでは意味があるのかもしれない，さらに，体も弱って歩けないなら，一層に意味があるかもしれない。でも谷間と言いますか，年齢の中年層の人々は依然として働き蜂と言われ働く世界の住人で，そこではやっぱり用件連絡処理という機能が突出するのではないかと思います。結論は，今の時点で携帯電話というものが何か，いかなる機器なのか，我々はそのこと細かな機能を知ってもいないという状況もあるし，これから5年後，10年後，iモードと連動したこの状況はどのように変わるのか，といったことをも多少理論的に整理しないと，困るかなぁという，研究者としてはすわりの悪い感触を持っています。

石田：高齢者というのをどこまで指すのかよくわからないのですが，自動車で言えば，自動車利用のライフスタイルが，高齢者はかなり確立している部分が多いようです。例えば，高速道路の改善に関連した委員会に出ていて，できるだけ高齢者にやさしい自動車道を作りたいという。高齢者にとってやさしいとは何かというと，高速道路はやさしくないのです。我々にとっては高速道路は安全でいい道なのですが，高齢者にとっては早いだけで恐いのです。だから使わない。どういうことをやっているかというと，高齢者が友達同士で集まって5人乗って70km，80km先の温泉までみんなで行く，そして楽しく帰ってくる。そういう生活に情報端末的なものをどんどん入れていくということが必要なのかどうかということが疑問です。何もそんなものなくても，温泉に行って楽しくやっていればいいじゃないかと，一面そういうようなところもあるのです。向井先生もおっしゃいましたが，高齢者を呼んできて実験をやりますと途中であきらめてしまう。私もワープロのオペレーターで，65歳くらいの女性に頼んで違う機種での入力をしてもらったら，途中で完全に動かなくなって2時間くらいたって，勘弁してくださいと言われ，そうですかと言って謝礼だけ渡して帰ってもらったことがあります。高齢者でそういうことをやると，すごく差が激しいのです。情報を積極的に取りたいという人と，どうしてもわからないという人に対するヒューマンインターフェイス研究の必要があるのですが，その前に高齢者はどのような情報を欲しがっているのかを知る必要があると思います。例えば，携帯電話。今の技術であれば，簡単に家とか親戚だけの登録ができて，大きいボタンで入力できるものがすぐ開発できると思うのです。我が家に高齢者の母親がいますが，やりたいのはビデオの予約くらいです。それも，3年前に最新式のに変えたら手をつけない。それまではビデオの予約録画を自分でやっていました。大きなボタンが付いて，何時何分とやると予約ができるから，私でもできたのに，とうらまれています。そういう意味で，高齢者が必要なものと我々が与えたいものとが随分違っていると思うのです。どうも我々はその辺りを考えてあげていない気がします。高齢者が運転しながら自動車電話を使ってどうなるかという研究があるのですが，一般ドライバーと，そんなに差がないという実験結果が出ています。もっとも，その実験の高齢者は50歳以上ですから，そんなに差はないのかなぁと思います。高齢者っていうと70歳くらいの人を頭に浮かべますが，そうなってきますと視力も低下し，携帯電話がなっても，すぐに対応することは不可能だと思うのです。企業としてはまた，高齢者向けのものを売り出しました。自動車も高齢者がいいと言うものは，若者もいいんだと言う高齢研究の方がいますが，全然そうではないと思います。高齢者向けのものを作ってほんとに売れるのか，よほどデザインがよくなければ売れないわけです。ビデオも最近高齢者が良くても，若者がダサくていやだよと買ってくれないのです。それ以上に高齢者は，最初に申しましたように，そんなに情報を必要としているのか疑問です。無理やり若者のようにどうでもいい情報を取る必要はないわけですから，必要なものさえあればいい，そういうようなものが求められるのではないかと思います。高齢者を心理学的にもうちょっとライフスタイルを含めてしっかり定義しないと，どういうふうな人に向けて，どういうふうな機器開発をするのかというのは難しいと思います。

正田：最後に，申さんコメントをどうぞ。

申：立教大学非常勤講師，申ともうします。私は，「現代若者考」という，1年間のエッセイのようなものを書いておりまして，そこで携帯電話に関することも少し触れています。今日は少しオーバーに若者の携帯電話の使用傾向について話をしたいと思います。まず南先生のお話にもありましたが，なぜ若者が携帯電話をよく使うのかということですが，そ

れは，「不安」，「人と繋がっている感じがするから」といったような，癒し系の道具みたいな感じで使われているのです。ただおもしろいことに，使用すればするほど実際に話し合う機会がなくなっているような気もするのです。例えば，恋人同士，友達同士がデートでマンガ喫茶に行くと，何時間もずっと一言もしゃべらず，お互い隣に座りながらマンガをずっと読みふけっている。いつ実際の会話があるのかと聞いてみると，お互いの家に帰る途中，もしくは家に着いた後に，お互い携帯電話で「今日楽しかったね」とか，「こういう本を読んでおもしろかったよ」とか，お互いの悩みも相談も携帯電話でするのです。実際会っているときには，会話がものすごく少なくて，メールや携帯電話を通して話をするというふうになっています。ところが，最近iモードなどが普及してきましてインターネットが使える，そしてメールのやりとりができるようになると，車内で若者が携帯電話で話をする人がいなくなったかわりに，電車の中でボタンをずっと押すようになりました。車内では話をしてはいけない，とはいっても，手持ちぶたさで暇だから友達に送りたい話を押していて，駅についたら早速それを送るという感じです。最近の若い人達は十二文字くらいで話が終わってしまうということが言われているのですが，そこがメールとマッチするのです。実際に話をするよりは，みんな忙しいみたいだから，まちがえてバイト中に携帯電話しちゃいけないからということで，iモード等を使ってメールで会話をすましています。濱先生のお話にもありましたが，宴会で実際に会ってはいるのだけど話すこともなくなっているようです。

携帯電話がたくさん入り込んで深く浸透している中で，ちょっと怖いなぁということもあったのですが，ただ，若い世代からもうちょっと上の世代，40代くらいの人たちも，実はウォークマンが出た時に人との話を拒絶するというようなことが社会問題として挙げられていたのです。人との物理的な空間を共有することを拒否し，どんどん，どんどんと内にこもって，今度はその対象がポケベルになって，次には携帯電話になったようです。つまり，20代，30代だけでなく，40代の人たちもそういうような傾向があるのではないかということです。その中でも各先生が触れられていたのですが，ライフワークの中で中高年の男性方は，携帯電話を用件として機能的な部分だけを使っているということがあったのですが，どうしてもそうなってしまいます。中高年の男性の携帯電話のイメージというのは，どちらかというと「拘束をされる」です。会社から連絡がきて，「こういうことをしなさい」というように，ポケベルの本来の用途の時代から使っていた方々は，やはり拘束をされるような嫌なイメージというところから始まっているような印象を受けます。

高齢者の方々を見てみますと，私は日大病院の近くに住んでいて，バスで大学に通っているのですが，意外にも，高齢者の女性の方は携帯電話を持っていらして「今から帰るわよ」と連絡し，一人でいるときにもちょっと寂しい時に，電話を使用するようです。しかし高齢者の男性の方はあまり持っていない。やり方がよくわからないというようなこともあるかもしれませんが，世代別に少しずつ使い方が違うということです。そして女性の立場から言うと，ワーキングマザー，いわゆる子どもを持っている女性が，幼稚園とか小学校から連絡が取りやすいように携帯電話を持つということが傾向として現れているのですが，実は，逆に携帯電話を持つことで拘束されてしまう。そんなに緊急であれば会社にでも連絡がつくのですが，なんとなくワーキングマザーも拘束を受けてしまって，変に精神的なストレスになっているという傾向もあります。

以上，世代間の携帯電話の使用傾向の話をさせていただいたのですが，南先生のおっしゃるように，中高年の男性は用件でしかない。他の世代の人たちは，どちらかというと娯楽，楽しみ，人とのつながりみたいな立場で使っているということです。どっちの方が理想となっていくのか，ということをお聞きします。また，すでに向井先生が細かくおっしゃって下さったので，あまり聞くこともないかとも思ったのですが，先生方のお話を聞いていて，何か暗い気持ちになってきたので，もう少し良いところはないのか，もう少し可能性はあるのかというところを補足していただければいいなと思っております。簡単ではありますが以上です。

森下：携帯電話に関するアレルギーに罹っています，森下です。先ほど中高年は拘束され持たないと言いましたが，私もそれが非常に強いのです。補足資料をお渡ししたのですが，働く人たちの30歳以

上の層に携帯電話でゆとりが生まれるかどうかを聞くと「いいえ」と答える人が多いのです。男性の若い人でもそうなんです。ところが，女性の方は申先生のご指摘にもありましたように，やっぱり楽しむというか，つながりを持とうとする，その辺が私は将来的にはつながり，楽しみの方向にぜひ高齢者問題も含めて，携帯電話はそちらの方向に行くべきだと思っているのです。

実際，男性の実態調査の中で通信内容の相手を見てみますと，やはり用件が中心で，例えば帰るコールの回答が多く，割と用件中心の回答が多いのです。女性は社外の友達と話をしたり，メールでやりとりをしたり，人間関係の対人関係面についてお互い話をしたり，あるいは趣味，スポーツ，対人交際で動いているわけです。

先ほど，ゆとりの話の際中国の勤労者は男女ともゆとりを尋ねた場合，経済的ゆとりを指し，日本人の勤労者は男女とも時間的ゆとりを指していると言いました。要するに，特に日本の男性は仕事中心が強いわけです。しかし，仕事意識そのものがこの10年で低下しつつあり，動きとしては余暇生活，社会活動意識の方に少しずつシフトしてきています。今世紀は当然のことながらその傾向がさらに進むであろうと考えています。

逆に，携帯電話の問題について話をしますと，実は私は長年産業心理臨床に携わっていまして，大企業の勤労者の方々のメンタルヘルス問題についてカウンセリングルームを通して活動しているのですが，昨年12月に30歳前の男性社員が社外の付き合っている女性からメールと電話がどんどん会社に入ってきて，最終的にはその男性は倉庫でメールと電話でのやりとりをし，ひどいときには一日3時間位するというケースがありました。そこで，会社の上司からその男性の話を聞いてほしいと依頼があり，会って話をしますと情緒不安定の女性からの電話やメールだっので相手にも問題があったのです。男性はその女性が好きでたまらない，結局のところ交際，つきあいで男性は余暇生活にウエイトが傾いていて，仕事どころでないという状況だったのです。私は携帯電話に関しては，むしろ個人の管理，コントロールが一層大事になってくると認識しています。一方，実際のカウンセリングの話ですが，社員の娘さんが不登校にかかって親との話が十分にできないでいるケースを取り上げます。お父さんであるその社員は，メールによって娘さんと交信し，お互いの気持ちが通じあえる働きがこのケースではみられます。帰るコールも含める用件機能だけの携帯電話よりも，むしろ中身のある携帯通信，メールも電話もそうなんですが，そう言う形のコミュニケーションへと携帯が拡がっていくと悪くはないのではと思います。地方自治体がお年寄りに携帯電話を持たせ，緊急の連絡として使うようにするということは，とても意味のあることと思います。私は，もっともっと機能だけ，あるいは用件中心の携帯電話から，さらに生活のゆとりを創造するような携帯電話が今世紀のなかで実現するとよいなあと思っています。

濱：私自身は，携帯電話もコンピュータも道具に過ぎないと思っています。あとは，どのような内容の情報がそこで行き交うかということに尽きるのではないかと思います。私の友達に小さな会社をしている者がいて，ずっと携帯電話を持っていなかったですが，持ち始めると歩きながら商談をしたりアポイントメントを取ったりして，もう手放せないということになってきて，実際そういうことをやるとゆとりがなくなってきます。本来，携帯電話で時間を有効に活用したならば，どこかで何か自分の本を読む時間とか余暇に使える時間が捻出できるはずなのにできていない。これは，ちょうど職場にコンピュータが導入された時に，ペーパーレスになると，これから紙の消費量が減ると言われていたのに，全く逆の現象になったのと似ています。携帯電話がはたしてゆとりを生み出さず，むしろ，それを侵食しているような構造になっていないかという点は一つの闇の部分だと思います。もうひとつは，先ほど申先生がおっしゃった若者のコミュニケーションの方法の観点から申しますと，マンガ喫茶で話をしない代わりに携帯電話で話をするということがあるらしいのですが，その辺を考えますに，我々が本来動物として生まれてもっている情報処理能力は，単なる言語だけでなく身振り手振りのいわゆるNV仕様の情報処理をしてきたわけですが，電話でそれがスポーンとなくなった。ご存知の通り，電話はお母さんが出ても娘と間違ったりするように，音声レベルの情報を割愛しています。それでもってよく間違ったりするのですが，携帯電話はさらに割愛していま

すから，本来，音声レベルではそういう機微のある情報伝達には向かないはずのものなのです。用件伝達ならいいわけですが，これで「君が好きだよ」といったような微妙な話をするようになった場合，はたしてそれが人間の持っている情報処理能力の根本からかなり離れてしまうことにならないかと感じてしまいます。むしろ，メールで短歌みたいな，例えば，私はメールで「おはよう」とは打ちませんが，めんどくさいですから「おはよ」になりますし，全部日本語は短縮されていく形になりますので言語は失われていくと思います。私達はもちろんまともな言語を知った上で，そういう言語の使い分けをしていくわけですが，今後さらに進んだ場合に，そういうコミュニケーションのすみわけ，使い分けができていくのだろうか，できなかったら，我々が培ってきたコミュニケーションという文化はどのようになるのかなぁという，また暗い話になっていくのですが，新しい機器をうまく使いこなすノウハウを次の世代が作っていけるかどうかがカギになると思います。

正田：南先生にお話していただく前に，今日は公開シンポジウムですので，フロアーの方々からも色々とご意見，ご提案を頂きたいと思います。南先生が話始めると長くなるので，その前にフロアーの方からぜひご意見を頂きたいと思うのですが，ご発言頂く場合には，失礼ですが所属とお名前をお名乗り頂いて，ご質問，ご意見を頂けないでしょうか？どうぞ，せっかく雪の中をいらして頂いたわけですから，ぜひご参加頂ければと思いますが，どなたかいらっしゃらないでしょうか？

細部：城西大学の細部と申します。森下先生のライフスタイルについてですが，私はあまり詳しく存じ上げてないのですが，この紙には中国と日本との比較ということでしたが，その前にインドネシアとかタイとかのライフスタイルについてお調べのようですが，調査上，携帯電話文化と一番ライフスタイルの観点から，4つの国では一概には言われないかもしれませんが，どこが遠い国でしょうか。また，それについてのコメントとお気づきの点でもあれば，お聞かせ頂きたいと思います。

森下：たぶん，私は携帯電話についての調査はしていませんが，中国は日本の次にかなり今携帯電話が普及していると思います。他の先生方何か意見があればおっしゃって頂きたいのですが，一番遠いのは，インドネシアじゃないかと思うのです。中国は今大都市中心に非常に活発に携帯電話が，むしろ普通の電話よりも普及してきていると思います。やはり，仕事意識の視点からいうと日本が一番高い水準にあると思います。余暇生活も日本は動きつつありますが，そのようなところでしょうか。具体的に，携帯電話に関する調査について各国で行っていませんので。

正田：他にもいかがでしょうか。フロアーの方で，ご意見はございませんでしょうか。では南先生，申さんの質問に対して意見があればどうぞ。

南：携帯電話と呼んでいるものがどのようなものになっていくのだろうかという，そのへんのところが未確定だと私は思っているのです。先週NHKの番組でやっていたものの中に，電子財布とかいわゆる切符の代わりのパスとか，またテレビ電話のように，子どもが花屋に行って「お母さんに言われた花がわからないのだけど」と言って，「じゃ，その電話で花を写してよ」とお母さんが言って，子どもが花を電話で見せ「この花よ」とお母さんが言う。このような未来図の説明をしていました。しかしそうなった場合，どうでもいい議論なのかもしれませんが，もう電話ではありませんよね。もちろん電話機能は組み込みなんですが，もはや電話以上の広がりを持っている。そうなった場合，光の部分はどこからくるのかというと，機械自体の使いやすさ，機械を使うことの費用，コストの問題ではないかと考えます。その機能のうちどの機能を使うか，それを使っている個々人が齢をとった場合どうなっていくのか，あるいは若者が大人になっていくことに向けてどのような意味があるのか，という問題は慎重に論議しなくてはいけないと思います。私はパソコンを時には使いますし，使う時には多少の習熟も必要ですので夜も寝ないでネットサーフィンなど色々としましたが，そのうち，必要なデータ処理の部分だけが残りました。添付ファイルだとかそんなのはめんどくさいです。しかし私が学生だったら，自分の勉強をほったらかしても朝までネットサーフィンなどしていると思います。しかし，このことがどのような意味を持つのかと言うのは別の話です。

あともう一つ，先ほど先生がおっしゃったように，そもそも「伝達」と呼ぼうが「通信」と呼ぼうが，

電波が飛んで何かをする，例えば風呂が沸いているとかは便利で快適なんだろうけど，そういったことが広がっていくこと自体が必要なのかどうか，そのへんの論議もする必要があると思いますね。会社から携帯電話を持たされている人で，案外 OFF にしている方が多いですよね。私の友達にもいますけど，論議のポイントをどこにおくのか，今の状況は色々なところにいくからおもしろいのですが，携帯電話がどういうふうになるのかということが確定できないというところが，一番のおもしろさであり悩みでもあるんでしょうね。それゆえ，光と影も一概には描き切れないと思っています。

石田：私の携帯電話の利用法は，大体夜遅くなって学生とのんだりした時に呼び出される。帰るコールではなく，帰れコールです。「もう，いい加減に帰ったら」という帰れコールです。電車の中で寝てしまった場合も，ビーッと震動して便利です。携帯電話というのは色々と利用形態とかあるのですが，普通の電話とあまり変わらないと思うのです。会社に行けば通常の固定電話で業務がいっぱいあるわけで，それが携帯電話に変わったというだけ。家庭に帰ればちょっと友人と連絡する。女性が電話が長いのは当然で，それが携帯電話に変わっただけでそんなに利用形態が変わったとは思えない。20 年くらい前に，テレビ会議システムをあるメーカーが開発していて，データ系と映像系が半々でお互いに通信速度が遅くて，とんでもないテレビ会議だったのですが，それはいずれ技術的に解決するのだから，まぁいいじゃないのといっているうちに，非常に見易いテレビ会議もできるようになった。そのうち携帯電話がどんどん普及すれば，テレビ会議システムも何千万もかけて会議室までいらない。ちょっとみんなが集まって携帯電話を見ながらできる，そんな時代がくるのではないかと思っています。しかし，大きな利用の形態としては，今までとそんなに変わらない利用だと思います。ただ，先ほどの帰れコールのようなものは，中年男性としては，嫌ですよね。会社からいつも電話がかかってきてかなわない。私思うのですが，今着メロってありますよね。着メロモードみたいなものをうまく使って，会社からは会社の社歌とか，家だともっとやさしいメロディだったり，友達だったらもっと楽しい音楽だったり選べればいいと思うのです。今でもナンバーを見て選べる電話機がある。携帯電話でもできると，もっと利用形態が広がるのじゃないかと思います。

正田：フロアーの方からもご意見を頂きたいのですが，そろそろ時間も迫ってきましたが，若い方からぜひご意見を，日本大学の大学院の吉村さん，若手の代表として何かご意見があれば，ぜひ。

吉村：日本大学大学院の吉村です。若手というふうなご指名でしたが，私は携帯電話を持ち始めて 3 年くらい経つのですが，申先生がお話されたようないわゆる現代の若者みたいな使い方はもうしなくなったというか，私自身の問題でしょうけど，あまり電話も掛かってきませんし掛けることもありませんので，そろそろ携帯電話をもう解約しようかなぁと思うくらいであります。それで，年齢と使い方というのは一概に一致しないのではないかと思います。昨日も父親からお昼すぎに電話が掛かってきまして，自分はたまたま研究室に居たのですが「用件は？」と聞いたら何もないんです。父親は「今一つ会議が終わって次の会議が始まるまでに，時間があったから電話したんだ」と言っていました。父親は，去年の暮れに携帯電話を買いまして使い始めたのですが，自分が最初，3 年ほど前に携帯電話を買って使っていた時と同じような使い方をしていると思います。用事もなくてただ何かの合間にちょっと家に電話してしまうという，そういう使い方を父親も同じようなことをしているなぁ，年齢とはあまり関係ないのかぁと思ったところです。

本題ですが，今日お話を聞かせて頂いている中で，コミュニケーション形態というのは実際変化してきていると考えます。ライフスタイルも変化してきますし，コミュニケーション形態，今までは家にある電話だけコミュニケーションを取っていたのを，携帯電話あるいは携帯電話に付いている e-mail といった色々な幅が増えてきたという意味では，形態が変わってきたというふうに考えています。それが近い将来，彼らが社会人になって就職したあかつきには，もっと上の人たちのコミュニケーションの取り方と若い人たちのコミュニケーションの取り方というのは違いますから，職場でどのような問題というか，近い将来起きうる問題というのをどのようにお考えでしょうか。もし起きるとしたらどのような問題でしょうか。

正田：将来どのような問題が起きるかということ

ですが，先ほど南先生が1997年の調査で，もう既に大分内容も実質的な事柄も変わってきたというような指摘がありましたので，南先生から一言だけ，今の問題に対していかがでしょうか。

南：働く場所での今までの対面的，対人的コミュニケーション，それがパソコンを利用してのいわゆるCMC，コンピューターメデエーテッドコミュニケーション，コンピューターを中心としたヒューマンウエアなどが，何をやっている組織であろうが，組織現場の中のモラルとか意思決定とか組織の業績とかそこで働く人たちの意思疎通に，どのような影響を持たらしていくのかという問題は，どの程度のタイムスパンで考えるのかということが大事だと思っています。とにかくそういうことに対してはデータに基づくしかものは言えないなぁと，感覚的に言ってもしょうがないだろうなぁ，と思っています。今のところ，私どもは，そういうデータをほとんど持っていないので困るなぁーと，そういう感じです。

正田：ありがとうございました。そろそろ時間も迫ってきましたので最後にまとめたいと思いますが，まとめというよりはなぜこのテーマを公開シンポジウムのテーマとして選ばせて頂いたかという，裏話をちょっと打ち明けさせて頂いて話を終了したいと思っております。実は，今日のシンポジウムは失敗であったと思います（笑い）。なぜかと申しますと，スピーカーが全部中高齢者，これは明らかに私のミスでありまして，若い人をスピーカーに，特にiモードを駆使するような方を1人か2人入れて，やればよかったということが実感として思っています。ただ，そうはいえこの応用心理学会の公開シンポジウムは年に一度であります。年に一度でありますので，毎年シンポジウム委員会が開かれまして，今年は何をテーマに取り上げるかものすごく悩むのです。最終決定するまでに，常任理事会で決まるまでにものすごく時間がかかる。たまたま昨年の末に私が係に命じられまして，応用心理学会の論文集をずっと過去数年調べました。そうしますと，今日ご発表して頂きましたスピーカーの方々が，いずれも先ほどご紹介されたテーマで携帯電話に関する研究発表をなさっている。これは，やはり社会的なニーズに沿った研究話題だと思ったのです。実は先ほどの南先生の話の中にありましたNHKの特集を，私も責任上毎回ずっと見ておりましたが，やはり今後は変わっていくと思うのです。生活自体の中にiモードがどんどん取り入れられ，携帯電話から雨戸が閉められるとか，先ほどの話のようなことがどんどん出てくるという時代になってくると思うのです。たまたま昨年，松永真理さんが書いた『iモード事件』という本が出まして，私も読みました。松永さんがリクルートからとらばーゆされてiモードを作った一連の経緯が載っている本なのですが，非常におもしろかったです。違う組織の中で葛藤して彼女が奮闘して，現在何百万台の売上に至ったという経緯まで書かれたドキュメンタリー小説です。あの本を読んでやはり組織の中を変えていく状況，学会の中を変えていく状況，そういうことを考えて，今後数年後，まさに今からiモードを使っている若い人たちの心理とか，あるいは心理社会的背景というものが，今後研究の課題に取り上げられて，応用心理学会でもぜひどんどん発表して頂きたい。また今日のスピーカーの方々にも継続研究をぜひお願いしたいと思います。

本日は，大変天候の悪い中ご参集頂きまして，ありがとうございました。最後にスピーカー，ならびに指定討論者の方々にぜひ拍手でお答え頂きたいと思います。これで公開シンポジウムを終了させて頂きます。（拍手）